

日本語母語話者の類義語分析ストラテジー：日本人大学生の場合

著者	坂口 和寛
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 10: 40-50(1999)
発行年月日	1999-10-10
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022425

日本語母語話者の類義語分析ストラテジー —日本人大学生の場合—

坂口 和寛

1. 問題の所在

一般に、日本語教師には多くの資質・能力が必要とされているが、その一つに、日本語に関する知識・能力が挙げられる。そして、日本語に関する知識のほかに、教師自身が日本語を分析することの重要性も指摘されている(柳沢 1993 丸山 1995)。日本語分析は学習者への指導を支えるもので、非常に重要な位置を占めるものである。

これまで、日本語分析に関する方法論については、日本語研究、特に意味分析研究の分野で扱われている。国広(1982)は「内省・場面・文脈」の観察により意味分析を進め、仮説を立てそれを検証するという方法を挙げている。そしてその具体的な手続きとして「文脈的作業原則」、「意味的作業原則」、「対照的作業原則」、「補助線による方法」といった作業原則を提案している。また、柴田ほか(1979)では意味分析の手法に関する留意点が挙げられている。これらは日本語分析の手続き的・操作的な側面に焦点を当てたものといえるが、有賀(1996)は語彙分析に必要な「分析の観点」に関するチェックリストを提案している。

以上のように日本語分析の方法に関する研究はなされているものの、“実際の日本語分析がどのように行われるのか”ということについての研究はほとんどない。そのため、日本語分析は個人に委ねられる部分が大きく、日本語分析の実態については不明な部分が多い。日本語母語話者は、いかにして日本語の分析を進めていくのであろうか。分析では、具体的にどのようなことが行われるのだろうか。

また、日本語母語話者が日本語を分析するプロセスを観察し、そこに見られる特徴や問題点を明らかにすることは、日本語教師の養成に対して重要な情報を提供する。日本語教師ではない日本語母語話者の特徴や問題点を把握することで、日本語分析において注意すべき事柄が把握できるからである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語母語話者の大学生(以下、「大学生」)の類義語分析プロセスを調べ、そこに見られる分析ストラテジーの種類と特徴を明らかにすることである。なお、本研究では、「ストラテジー」を“何らかの課題を達成するために、人が意識的もしくは無意識的にとる様々な行動”と規定する。そして、“日本語を分析する”という課題を達成するために用いるストラテジーについて、特に『分析ストラテジー』と呼ぶこととする。

日本語分析にも様々なものがあるが、なかでも類義語の分析は日本語指導を行う際には多く遭遇するものである。また、類義語は日本語学習者の日本語能力の伸長に関わる、語彙指導上の重要事項である(倉持 1986)。このようなことから、今回、日本語分析に類義語分析をとりあげる。なお、ここでの「分析」とは、「自身の言語知識・言語経験・言語的直感を利用して、類義語の基本的特徴や弁別的特徴を探ること」である。

3. 研究の方法

3. 1 データの収集方法

個人面接調査により発話データを収集し、プロトコル分析によって日本人大学生の分析プロセスを調べた。「プロトコル分析」とは、被調査者の思考過程を調べるための方法である。被調査者はある課題を与えられて解き、そしてその過程で考えたことを全て発話する。被調査者の発話は録音し、文字化したプロトコルから思考過程を分析する。

調査は1998年1月から1998年8月にかけて実施した。調査では、手順などに関する説明と発話思考法の練習をした後、一枚に一つの語が書かれた3枚一組のカードを被調査者に提示し、課題である類義語の違いを考えてもらう。被調査者はカードを見ながら考えたことをそのまま発話する(発話思考法)。このとき分析に利用できる資料や参考書などはなく、被調査者は自身の内省によって分析する。被調査者が「終わりにしてもいい」と判断した時点で発話をやめてもらうが、分析開始から10分経った時点で分析が途中で調査者が中断したため、発話時間は一番長い被調査者でも10分である。発話をテープレコーダーで録音、同時にビデオでの録画も行った。全ての課題が終了した後でインタビューを行い、プロトコルの分析に参考となる補助的な情報を収集した。

3. 2 被調査者

被調査者は、東北地域に在住の大学生・大学院生16名である。全て国語学・日本語学および日本語教育学を専門としていない学生である。大学生・大学院生を調査対象者としたのは、本研究で得られた結果を、高等教育機関における日本語教師養成に活かすことを目標としているためである。

3. 3 調査で用いた類義副詞

類義語には様々な品詞が見られる。なかでも、特に副詞は日本語学習者にとっての学習・運用上の困難さが問題となり、中上級レベルの学習者には使い分けが頻繁に問題となる。そして、使い分けには意味内容以外の様々な要素に関わるという複雑な学習項目であり、事前の分析が重要になる項目といえる。

一般に、副詞は情態副詞、程度副詞、陳述副詞の3つに分類されることから、被調査者に提示する副詞には、情態群「ゆっくり/ゆったり/のんびり」、程度群「と

ても／きわめて／はなはだ」、陳述群「ぜひ／どうか／なにとぞ」という3グループ、9個の副詞を取り上げた。副詞の選定にあたっては、1)類義語辞典などを参考に、一般に類義性が認められているもの、2)「日本語能力検定試験」の出題基準の中にあるもの、という2点を基準とした。調査では、“情態群→程度群→陳述群”の順番で被調査者に提示した。

4. 結果と考察

4. 1 プロトコルデータの分析

録音状態が悪いために分析できなかったデータを除いた、被調査者14名分のプロトコルから、大学生による類義副詞の分析プロセスを観察し、そこで見られる行動をその特徴を明らかにする。

まず、録音した発話を文字化したプロトコルを区切り、より小さい『ユニット』という単位に分ける。基本的には内容的な境目に注意しつつプロトコルを区切っていくが、区切る際には以下のような点にも注意した。

- ①「文」としての体裁を整え、述語部分で終結している部分
- ②複文の場合、従属節と主節の境目となる部分。
- ③文がねじれている場合は、そのねじれた部分

以上のようにして区切ったユニットを分析単位とした。表1はユニットに区切られたプロトコルデータの実例で、大学生Nが情態副詞群「ゆっくり／ゆったり／のんびり」を分析している。ユニットの両端にある数字はユニットの通し番号である。

次に、区切ったユニットそれぞれを、“被調査者が何をしているか”という行動面からみて分けた結果、以下に挙げるような[A]～[I]という9のカテゴリーに分類することができた。なお、()内の数字は表1中にあるユニットの通し番号で、各カテゴリーの具体例である。

- [A]分析へのとりかかり (1-5、15、25)
- [B]類義語間の関係把握 (9、10、14、16)
- [C]類義語の内実に関する分析 (6、9-11、16-19、21、24)
- [D]関連する言語項目の利用
- [E]類義語の使い方に関する分析 (13-14)
- [F]自分の分析に関するコメント (20)
- [G]例文の作成 (7、12、22-23、26-27)
- [H]例文に関する分析 (8)
- [I]その他 (28)

表1 ユニットに区切られたプロトコル(大学生N:情態副詞群の分析)

No	プロトコル(ユニット)	No	コード1	コード2
1	・・・次の言葉はどう違いますか、	1	とりかかり	
2	考えてください。	2	とりかかり	
3	「ゆったり」、「ゆっくり」、「のんびり」。	3	とりかかり	
4	「のんびり」、「ゆっくり」、「ゆったり」。	4	とりかかり	
5	「ゆっくり」と「ゆったり」、	5	とりかかり	
6	んー、「ゆっくり」は動作がゆっ、緩慢・・	6	内実分析	
7	「ゆっくり動く」、	7	例文作成	
8	緩やかに動く。	8	例文分析	
9	「ゆったり」は・・うん、おんなじ動作でも、	9	関係性把握	内実分析
10	おんなじ動作がゆっくりでも・・	10	関係性把握	内実分析
11	精神的に、のんびりしている雰囲気が入る・・	11	内実分析	
12	うん、どう、うん、「動作がゆったり」。	12	例文作成	
13	ただ、精神的にのんびりしているだけでも使う言葉。	13	使い方分析	
14	で、「のんびり」は・・動作にはつ、あんまり使わなくて、	14	関係性把握	使い方分析
15	「のんびり」・・	15	とりかかり	
16	うん、「ゆっくり」、「ゆったり」、「のんびり」って感じで変化するかな。	16	関係性把握	内実分析
17	「のんびり」が、精神的な・・表現、	17	内実分析	
18	精神的な意味をふく、多く含む。	18	内実分析	
19	ゆったりした気持ちっていうか、	19	内実分析	
20	こう、おんなじになっちゃうな、	20	コメント	
21	「のんびり」・・リラックスしている。	21	内実分析	
22	「のんびりした毎日」と、	22	例文作成	
23	んー、「のんびりした休日」とか。	23	例文作成	
24	うん、「のんびり」は行動が入らないことが、多い、かなあ、	24	内実分析	
25	「のんびり」・・うん、「のんびり」、	25	とりかかり	
26	「のんびりする」。	26	例文作成	
27	「心がのんびり」・・・・・	27	例文作成	
28	はい、以上です。	28	その他	

以下、[A]～[I]の各カテゴリーについて、具体的な説明を加える。

[A]分析へのとりかかり

このユニットは、具体的な分析を始める前に分析の方向性を決めたり模索したりする行動をものである。分析の開始直後に現われるものと、分析途中で現われるもの、という大きく2種類がある。前者は、与えられた課題がいかなるものか把握・確認したり、分析対象となる類義副詞がどのようなものかと認知するといった行動である。後者は、複数与えられる類義副詞のうちから分析する対象を選んだり、どのような観点から類義副詞の違いを探るか決めるような行動である。なお、表1に見られる[分析へのとりかかり](通し番号1と2)のユニットは課題の内容を把握しているもので、メモ用紙に書かれた指示文を読みあげている。

以上のほか、沈黙を伴ったフィラーや副詞などを繰り返して発話しているという行動がプロトコルに多く見られる。これらは、被調査者が頭の中で模索する様子を表しており、何をどうすればいいのかが被調査者の中で明確になっていない状態である。このような模索的な行動も「分析へのとりかかり」とするが、実質的には分析が行われていない、もしくは進んでいない。具体例としては、表1のユニット15とユニット25がそれである。

[B]類義語間の関係性把握

分析対象の類義副詞について、共通性に注目して副詞同士を関係づけたり、逆に副詞間の差異に注目してグルーピングするといった行動を表すユニットである。〈例1〉では「ぜひ」と「なにとぞ」という2つの副詞を関係づけており、〈例2〉では、3つの副詞を大きく2つに分けている。

〈例1〉「なにとぞ」と「ぜひ」っていうのは、意外と似てるもんだな、そう
するとな・・・ 【大学生I】

〈例2〉えーと「ゆっくり」、がこれが「ゆったり」と「のんびり」と「ゆ
っくり」が分けて 【大学生B】

副詞同士の類似性を単に指摘するだけでなく、意味や使い方などの点から、共通性や差異をより具体的に把握して関係づけやグルーピングを行う場合もある。表1の大学生Nの場合は、ユニット9と10が「類義語間の関係性把握」となるが、このユニットでは意味内容の点から「ゆったり」と「ゆっくり」の類似性について述べている。

[C]類義語の内実に関する分析

まず『内実』ということについて説明をする。本研究では、『文脈とは切り離された状態で見られる、言葉そのものの内面的な特徴』を「内実」とする。具体的には、言葉が持つ意味内容・直接的指示内容、ニュアンス、品詞的特徴、評価性といったものである。

このカテゴリーのユニットは、副詞の内実に焦点を当てて類義語の違いを探ろうとする行動が見られるものである。具体的には、類義副詞の意味を具体的にとらえたり、意義素的なものを抽出したり、意味範囲の広さについて考えたりする、といった場合である。

〈例3〉「はなはだ」ってのはこれ程度だ・・・ 【大学生H】

〈例4〉で、と・・・単純に、「ゆっくり」っていうのは、速度が小さいことを言
うから 【大学生K】

〈例5〉なんか守備範囲が広い・・・ 【大学生I】

意味内容のほかにも、品詞的性質や副詞そのものから感じるニュアンスなどといった、言葉の内面的特徴を分析する。

〈例6〉まわりくどくなくていいイメージが自分には、あるんだけど

【大学生B】

【大学生M】

<例7> 「どうか」のほうが重い気がする

[D]関連する言語項目の利用

一つの課題について3つの類義副詞が分析対象として提示される。しかし、その3副詞以外で、類義性などがある言語項目を利用して類義副詞を分析するという行動を示すユニットが見られる。そのようなユニットは、[関連する言語項目の利用]というカテゴリーに入るが、利用する言語項目の種類という点で違いが見られる。例えば、副詞の転成元であるような語彙を利用するもの(例8)、分析対象である副詞を漢字表記に変換し手がかりを得ようとするもの(例9)、そして、提示された類義副詞以外で類義語を思い浮かべるもの(例10)などのような違いである。

<例8> 「きわめて」の前はでも「きわめる」とかいうのがあるから

【大学生F】

<例9> 「はなはだ」って漢字でどう書くんだろう

【大学生N】

<例10> 「とても」と「非常に」っていうのは似てるけど

【大学生K】

[E]類義語の使い方に関する分析

[C]の[類義語の内実に関する分析]では、文脈と切り離されたときに見られる内面的な特徴に焦点が当たっていた。それに対して、分析対象の副詞が、文脈の中でどのように振る舞うかということに焦点を当てて分析する場合が[E]である。

ここでの「文脈」とは、副詞が現われる言語環境である『言語的文脈』と、副詞が使われる発話場面などの『場面的文脈』という2つに分けて考える。言語的文脈との関わりから類義副詞を分析する場合は、ある表現形式と副詞との共起関係を探ったり、共起する言語形式などの特徴を明らかにしようとする(例11)。また、場面的文脈との関わりから分析する場合は、ある副詞が実際にどのような場面で使われるのかという点に注目して、類義副詞の違いを考える(例12)。

<例11> 「はなはだ」はもう、悪い言葉しか来ないし

【大学生B】

<例12> うん、なんか、「なにとぞ」とかって、こう、すごくかたい感じの、

お願いする文とかに使う・・

【大学生D】

なお、[E]で取り上げられる事柄としては、共起関係や使用場面のほかに使用頻度や用法などもある。

[F]自分の分析に関するコメント

このカテゴリーに入るユニットは、『類義副詞について分析をする』という行動とは若干異なる。[F]に入るユニットは、類義副詞を分析している過程の自分自身の状態や分析状況、直面している問題について、第三者的な視点から眺めるというメタ認知的な行動を示す。例えば、表1中のユニット20は、自身の分析についてコメントしているもので、「のんびり」の内実を分析をした結果、「ゆったり」との違いが明確にならないことに気づいている。その他の具体例としては、<例13><例14

>のようなユニットがある。

<例 13>んー、まあ、あまりいい例が浮かばないから 【大学生F】

<例 14>んー、なんかちょっと混乱してきた 【大学生L】

以上のほかにも、分析が進まず類義副詞の違いが見つけれないときに「わからない」と述べたり、分析対象の類義副詞について「難しい」などと感想を述べたりする場合、分析してたどり着いたことの適切さをチェックする場合も〔F〕に含まれる。

〔G〕例文の作成

言葉の分析において例文を作ることの重要性は従来多く指摘されている。柴田ほか(1979)は意味分析の方法を言及するなかで、意味分析で「文」を作ることが重要な位置を占めると述べている。柴田らによれば、「文」には「自分の頭で考え出す」と「実際の文例」の2種類があるが、収集したプロトコルデータを見ても、被調査者自身が例文を作成し、そこから何らかの情報を得て類義副詞の違いを探るのに利用している様子うかがえた。〔例文の作成〕というカテゴリーには、例文作成行動の見られるユニットが含まれる。今回の調査のように資料や参考書を使用しないで類義語を分析するときには、「自分の頭で考え出す」例文が分析に大きく関わる。

〔例文の作成〕に入るユニットは、その目的によって大きく2つに分けることができる。一つは探索的に例文を作る場合で、そこから何らかの情報を得ようとする。このとき、作る目的などは明確ではなく、単発的に作られることが多い。もう一つはそれとは逆に、分析途中で分析者は何らかの仮説を立てることがあるが、その仮説の妥当性を検証するために例文を作る場合である。これは、探索的に作る場合と比べると、より意識的な例文作成だといえる。

また、以上のような作成目的ではなく作成手順という点からも、例文作成を示すユニットにいくつかの種類がある。例えば、単発的に例文を作る場合と連続的に例文を作る場合、という違いである。<例 15>は連続的作成の具体例だが、同じ文を用い副詞部分だけを取り替え例文を複数作っている。また、表1のユニット22と23では、「のんびり」という一つの副詞について複数の例文を作っている様子が見られる。

<例 15>「ぜひお願いします」、「なにとぞお願いします」、「どうかお願いします」 【大学生C】

その他、<例 16>のように、具体的な意味内容を持たず構文・文型のような体裁の例文を作る場合も見られた。

<例 16>「なにとぞなににしましょう」 【大学生B】

〔H〕例文に関する分析

作成した例文について、何らかの分析を行っているユニットである。具体的には、例文が正用文か誤用文かを判断するという正誤判定を行う場合で、<例 17>では、

大学生Fが自身の作った例文に関して正誤判定をし、誤用文と判定している。

<例 17> 「ぜひ勘弁」とかは言わねえな・・・ 【大学生F】

また、表1中にあるユニット8のように、作った例文についての具体的な情景を考えて述べる場合や、例文の表す内容や例文から明らかになることなどを述べる場合もある。

[I]その他

このカテゴリーには、分析が終わったことを述べているようなユニットが入る。具体的には表1中のユニット28のようなものである。また、分析とは直接的に関わらないことを述べている場合や、[A]～[H]のどのカテゴリーにも当てはまらず、分析に対して直接的な影響はないと思われる行動を示すユニットがこのカテゴリーに入る。

<例 18> んー、ギブアップです。 【大学生M】

4. 2 カテゴリー別ユニット数から見た大学生の類義語分析

大学生の総ユニット数とカテゴリー毎のユニット数を表したのが表2である。大学生の総ユニット数は2851個であった。なお、一つのユニットが複数のカテゴリーに属することがあるために、各カテゴリーのユニット数の合計は総ユニット数にならない。また、総ユニット数に対する各カテゴリーのユニット数の割合をグラフで表したものが図1である。

表2 カテゴリー別のユニット数

ユニット総数	とりかかり	関係性把握	内実分析	関連項目	使い方分析
2851	790	232	681	77	675
	コメント	例文作成	例文分析	その他	
	156	407	123	50	

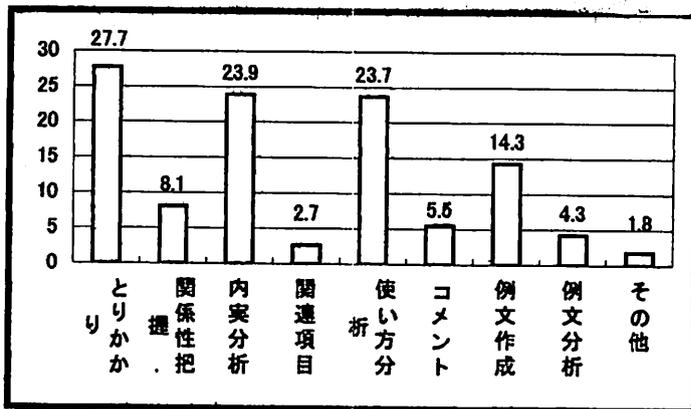


図1 カテゴリー別のユニット数(単位:%)

図表から、[分析へのとりかかり]のユニットが最も多く見られ、ついで[類義語の内実に関する分析]、[類義語の使い方に関する分析]のユニットが多い。しかし、[分析へのとりかかり]には実質的な分析活動とはいいいにくい模索行動も含まれているため、ユニット数が最も多くなっているものと考えられる。大学生の類義副詞分析においては、副詞の意味や性質といった内面的特徴に焦点を当てた分析、そして副詞の使い方に関心を当てた分析が中心に行われることがわかる。

また、[類義語の内実に関する分析]や[類義語の使い方に関する分析]のユニットに比べると、[例文の作成]ユニットの割合が少ないようである。それに関連して、[例文に関する分析]ユニットは非常に少ないものである。このことから、日本人大学生の類義語分析においては、例文を作るといことがあまり行われずに分析が進むことを表しているようである。

4. 3 日本人大学生が用いる分析ストラテジーとその種類

プロトコルデータから、日本人大学生が類義副詞について分析する際には、様々な行動をとることがわかった。ここでは、そのような分析に関する行動を「ストラテジー」という観点からとらえなおしてみたい。

プロトコルデータに見られた被調査者の諸行動から、分析ストラテジーとして認められるものを抽出した結果、以下の(1)から(8)のように整理できた。被調査者は、さまざまな分析ストラテジーを用いて類義副詞の違いを明らかにしようとしている。

(1) 方向付けのストラテジー

分析対象である言葉のどのような側面に焦点を当てるのか、またどのような手順で分析していくのか、などについて明確にするストラテジー。

(2) 関係把握のストラテジー

分析対象となる類義語の間の類似性や差異性に注目し、言葉同士を関連付けたり分類したりするストラテジー。

(3) 内実分析のストラテジー

意味内容やニュアンスなど、言葉そのものが持つ内面的な諸特徴を明らかにするストラテジー。

(4) 使い方分析のストラテジー

実際の場面における言葉の使われ方や、文末表現などとの共起関係という点から、言葉の特徴や類義語との違いを明らかにするストラテジー。

(5) 例文作成のストラテジー

例文を作るストラテジー。例文を作ることで何らかの情報を得たり、分析途中で立てた仮説の妥当性を検証する。

(6) 例文分析のストラテジー

分析の途中で作った例文の正誤判定や、例文の内容を明らかにするなど、例文そのものについて分析するストラテジー。

(7) 関連項目利用のストラテジー

分析対象の言葉以外で、関連性のあるものを利用するストラテジー。

(8) 自己把握のストラテジー

分析の途中、分析者が自身のおかれている状況を認知するストラテジー。

5. まとめと今後の課題

本稿では、日本語母語話者の日本語分析プロセスを探るため、日本人大学生を対象に面接調査を行い、プロトコルデータを作成して分析プロセスを調べた。その結果、類義副詞の違いを分析する際に、日本人大学生が様々な行動をとっていることが明らかになった。そして、それら様々な行動についての特徴を記述したうえで、8種類の分析ストラテジーを抽出した。

今回、日本人大学生による類義語分析の過程でいかなる分析ストラテジーが用いられるか、という実態を把握し分析ストラテジーの特徴を記述することが目的であった。そのため、分析ストラテジーの使用が分析に与える影響については扱わなかった。分析ストラテジーをどのように使用することが類義語分析にとって有効に働くのか、逆に有効に働かないのか。このような問題について、詳しく見ていく必要があるだろう。

また、今回の分析では、“分析対象となる副詞群の違いによって分析ストラテジーの使用に異なる点はあるか”ということは扱わなかった。調査で被調査者に提示する課題として、情態副詞群、程度副詞群、陳述副詞群という3つのグループを取り上げた。このような類義副詞の性質の違いによって、分析の仕方が変わってくることも考えられる。副詞の種類と分析ストラテジー使用との関連についても詳しく見

る必要があるだろう。以上を今後の課題としたい。

付記：本稿は、平成10年2月13日に行われた「長野県ことばの会」研究発表会で口頭発表したものの一部に、加筆・訂正を加えたものである。当日有益なご助言を下さった方々に心より御礼申し上げる。

【参考文献】

- 有賀千佳子（1996）「『語彙分析』に必要なことー語彙項目の用いられる『文脈』を中心にー」『日本語学科年報』17 東京外国語大学日本語学科
- 国広哲弥（1982）『意味論の方法』大修館書店
- 国広哲弥（1991）「意味の似た言葉」文化庁編『「ことば」シリーズ34 言葉の意味』大蔵省印刷局
- 倉持保男（1986）「日本語教育における類義語の指導」『日本語学』Vol. 5、No. 9 明治書院
- 柴田武ほか（1979）『ことばの意味2 辞書に書いてないこと』平凡社
- 丸山敬介編（1995）『日本語教育演習シリーズ④ さまざまな表現』Vol. 2 凡人社
- 柳沢好昭（1993）「言語・学習項目分析を通じた専門性の開発」『日本語学』Vol. 12、No. 3 明治書院

（さかぐち かずひろ・信州大学人文学部講師）